

# 泉大津市立病院院長が反省の弁 野宿生活者への配慮が不足

## 救急担当医が患者の社会的背景に留意した治療方針を選択するよう指示

3月7日、地域外(府)で就労していた谷口さんが、11日午後11時20分、杏林病院で亡くなった経緯については、前号で知らせた。

野宿生活者への無理解、あるいは差別が泉大津市立病院に存在して、重篤な谷口さんを更に苦しめたと、私たちは考えた。

実際にはどうだったのか、当事者の話を聞きに、27日、泉大津市立病院にでかけた。最初は2名で出かける予定であったが、仲間の死にまつわることで関心が高く、結局、輪番労働者、指導員も含めて10名で行くこととなった。

病院側も2名くらいの来訪を予定されていたようで、会議室は準備されていなかった。院長も「10名という圧力を感じる、そういう形では話しづらい、せめて3名にして欲しい」ということであった。当初こちらも人数を伝えていなかったこともあり、5名が同席して話を聞くこととなった。

冒頭、院長は「私が言ったように、その日の内に入院されたのですか、すぐ医者にかかるように、薬も1日分しか出しませんでしたが」と、自身の気がかりを先に確認された。

大阪についてすぐ救急搬送で入院したことを伝えると、「それは良かった」と、少なくとも医療が継続していたことに安堵されていた。

治療の様子については、本人と話をして意識ははっきりしているし、肝臓や結核については治療を受けたことがあると聞いたので、薬は現在飲んでいないにしても、医療機関にはかかっていると思った。貧血はなく、血圧の低下もなかった。体内での出血は考えられなかった。

立場上、救急を担当することは年に1度か2度くらいしかなく、今回はたまたま私が担当する日だった。この病院の地域外の人々の救急患者はそう多くなく、電車の中で気分が悪くなって運ばれてくる人があるくらい。そういう人達は、応急手当をすませれば、居住地の医療機関にすぐ移られる。当病院は急性期の病院で、平均入院期間も12日と短い。谷口さんも、なじみのある地域に帰って医療を受けるのがいいと考えた。そのつもりでその日の内に医者に行くように、念を押した。

しかし、その後、谷口さんが亡くなられたことを聞き、また、昨日の新聞やテレビなどで野宿をしている人が全国的に多いことを知り、これからも増え続けるだろうと考えたときに、そういった立場に置かれている人の背景や立場に考慮した治療を考える必要があったと反省している。

---

## 釜ヶ崎支援機構へも協力要請・健康管理をすべきー

と。

今後は、救急を担当する内科医全員に、患者の社会的背景をも考慮に入れた治療方針を選択するよう伝える。

入院も当然あり得る。元々医者として、行路であろう健康保険を使う人であろうと治療する段階で区別することはない。ただ、安定した生活にある人とそうでない人とでは違った基準での対応が必要だと言うことに思い至らなかった点を改める必要を今回のことで気付いた。そのことを伝える。

ただ、この病院は平均入院期間が短いので、転院が常にある。転院先の心配や退院後の患者さんの生活のことなどで、今後、釜ヶ崎支援機構として相談にのってもらえるとありがたい。

医者の立場から言わせてもらえば、仕事をしてもらうのなら、仕事できる状態かどうかの日常的な健康管理をおこなうべきではないか。

泉大津市立病院の岡澤院長には、今回のことを真剣に考えていただいたようだ。谷口さんには間に合わなかったが、今後は改善されそうだ。

釜ヶ崎支援機構にも課題が残された。

今回の全国調査では、府下の野宿者数も明らかとなった。豊中56、枚方54、泉大津52、茨木48、寝屋川47、吹田46、高槻41、摂津41、高石40、池田23、松原20など。

把握された数字は、実際の数字よりも少ないと考えられるが、今回のことで改めて浮かび上がったことは、府下に存在する野宿を余儀なくされている人々が、どのような医療を受けられているかである。

医者の多くが、野宿生活者の生活について理解しておらず、救急でかかったとしても、治療の継続については、考慮されることなく医療の外へ放り出されている状態にあるのではないか。医療従事者に、野宿生活者の存在について、伝えていく必要がある。

少なくとも、救急医療の現場に、安定した生活基盤を確保している人とは異なる生活を余儀なくされている人々の治療継続確保についての認識を確立する必要がある。具体的なシステムを構築する必要がある。

釜ヶ崎支援機構の次の課題である。

また、日常的な輪番労働者の健康管理についても、真剣に取り組みを始める必要がある。

仲間の健康問題は、わかっているけど「対処療法的」なことも充分にはおこなわれてこなかった。病気の一つや二つは当たり前。せいぜい、「はよ、医療センターに行きや」というのが精一杯。胃の当りを押さえて足を踏ん張っている輪番労働者に「今日は休んで医療センターにいったら」、「いや、仕事に行く」「ほな、これ持って行き」と胃薬を渡す。

治療を継続することは難しい。生活の保障がなければ難しい。分かり切ったことだが、もう少しなんとかし

たい。

さてどうする。

---

とりあえず、気休めにしかありませんが、血圧計と体重計、身長計を備え付けました。血圧計は、病院にも備え付けてあるのと同じもので、一人ではかれる優れものです。血圧の高い低いは健康のバロメーター、結果が印字されて出るので、就労のたびにはかると健康管理に役立ちます。わかったところでどうなるの、なんてことはとりあえず言わないでね。